済南への旅で感じたこと

随　筆

竹　本　喜　一*

Impression on the Travel to Jinan, China

Key Words : Jinan, Symposium, Fine chemistry, Functional polymer

中国の山東省に済南という都市がある．現在は山東省の省都であるが，歴史は古く，春秋の戦国時代から斉の都として栄え，多くの景勝地を郊外に控えた，泉の多い美しい都市である．

この町で，1994年10月，第5回の精密化学及び機能高分子に関する国際シンポジウムが開催され，私は妻同伴でこれに出席することになった．

シンポジウムは華僑出身で香港在住の邵逸夫という人の寄付になる，山東大学キャンパス内の近代的な建物で4日間にわたって行われた．今回の事実上の実行委員長は孔祥正という，山東大学の若い高分子化学の教授で，名前の示すとおり孔子の子孫に当る人であった．10月12日，開会式のあと3件の基調講演で幕をあけ，連日招待講演，討論そしてポスターセッションなどでにぎわった．講演の内容は機能高分子の合成，物性，応用を中心として，広く有機合成化学や有機金属化学にまで及び，幅広い話題にみちていた．参加者は海外から日本を含めて50人くらい，また中国側からは，200名近い出席が見られたが，若い人達が多く，中国の学問，技術の明るい将来を感じさせるのに充分であった．私は開会の挨拶と，冒頭の基調講演を受けもち，機能性高分子の最近の発展について，私見を交えた総括的な材料科学の話を述べた．

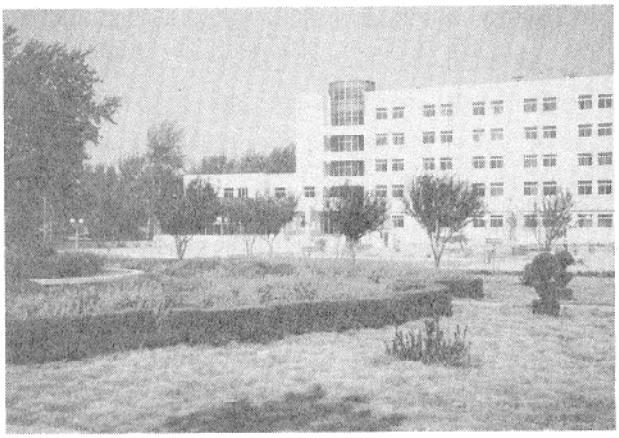
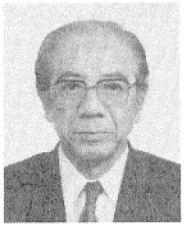


図1　国際シンポジウムの会場となった山東大学の会館

この国際会議は，私にとって大変印象深いものがあった．1987年，安徽省の合肥でこの第1回のシンポジウムがもたれて以来，1～2年に1度の割合で，定期的に中国各地を廻りながら開かれて来たもので，最初は確か中国・日本だけの集まりであったのが，今ではユニークな国際会議に成長し，回を増すごとに盛況になって来ている感がある．何といっても，この会議の企画と実行の立役者はわが親友で，阪大同級生の中国科学院・化学研究所の江英彦教授であり，その話のはじまりは1981年に彼と雲南省の昆明を訪れたときであった記憶がある．中国では文革が終ってから，若い研究者，学者の間で学問・技術に対する意欲と熱情はすばらしく高まっており，できるだけ多くの人々に満足して頂けるような勉強の場の必要性が痛感されて



* Kiichi TAKEMOTO
1930年2月14日生
昭和28年，大阪大学工学部，応用化学科卒業，大阪大学名誉教授
現在，龍谷大学理工学部，物質化学科教授，工博，機能性高分子
TEL 0775－43－7660

いたころの話であった．

回を重ねるにつれ，この会議も中国・日本間のものから，いつしかアジア諸国や欧米の学者を交えた国際的なものへと発展するに至った．特筆できることは，1990年に甘粛省の蘭州にある西北師範大学で開かれた第3回の会議に，はじめて台湾の学者の招待が実現し熱烈な歓迎をうけたことであった．今回は遂に韓国の学者が何人か招待され，思想と民族を越えたアジアの高分子会議の色彩はますます強まって来ている．

この会議も，他の国際シンポジウム同様，熱心な発表や討論ばかりではなかった．毎晩のように催されたバンケットや夕食会では，参加者全員が大きいホールで入り交って踊り，歌い，友情のきずなを作り上げた．今回は残念ながら日本の高分子討論会と日が重なったため，日本人の参加は20数名にすぎなかったが，ご夫人連中の日本の歌の合唱は広い会場を昂奮の渦の巻きこみ，それに誘発されて各国はじめ中国各地の民族音楽の演奏や歌がくりひろげられ，しばし夜のふけるのを忘れる程の盛会であった．江君の夫人，黄美玉教授のご苦労も大変なものであったと思う．

済南は中国の大河の一つ，黄河の南岸に位置し，近くには歴代皇帝に信仰厚い中国五岳の一つ，泰山や，孔子の生まれ故郷で2400年の歴史をもつ小都市，曲阜がひかえている．シンポジウムの参加者全員がバスを連ねてこれらの地を訪れ，エクスカーションの一日を大いに楽しむことができた．泰山は今や，頂上近くまで日本製のロープウェイが通じ簡単に登れるようになったが，石段を降りての帰路は，4000段の道のりに疲れきった人も多かった．

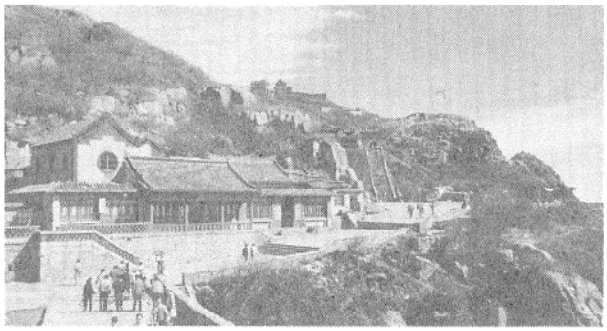


図2　泰山山項付近の風景

このシンポジウムは1996年には河南省の鄭州で，また1997年には，再び山東省の威海で開催される予定で計画が進んでいる．威海は海を越えて韓国の仁川に近く，これだと実に多くの韓国からの参加者が見込めそうである．

江英彦君とよく話すことがある．この国際会議，といっても実質は中国と日本両国間が中心であったが，一度も日本で開催することもなく今後も，これはこれで中国各地を廻りながら末長くつづけていきたいと願っている．21世紀はアジアの時代といわれることに私も大賛成である．しかしながら，アジアを中心とした実のある国際会議を日本で開催することが不可能に近い程，日本では物価，施設，宿舎が高く，また運営委員の苦労も並大抵ではない．このような，日本で開催しないユニークなアジアの会議が一つ位あってもいいと私は思っている．このシンポジウムはいろんな意味で大きい成功を収めてきており，将来も期待をこめてその展開を願うものである．

最近新聞やテレビで，中国のすざましい発展ぶりが紹介されるようになった．このことについて私の率直な感じを述べてみたいと思う．

ちょうどこの原稿を書きながら，送られて来た生産と技術誌の昨年の新年号をみていると，阪大のこれまた同窓である松田治和教授の随筆が目についた．この記事にもあるように，中国における農村の近代化や旅行者の多さ，経済，工学の発展ぶりは，ほんの数年前と比較しても私の目には大へんな変り様である．中国国内の移動は，飛行機の予約も容易なものではないが，列車の旅などは到底約束できないほど，切符の入手が困難になって来ている．その代り中国各地に急激に建設されてきた高速道路は，われわれ旅行者にとって大へん有難い存在になって来ている．私の今回の旅で滞在した地方都市済南でも，空港・都心間の高速道路は青島へのびて，時速100km以上の移動を可能にしている．済南のような規模で，北京や上海から離れた都市でも，町の近代化と美化は進んでおり，私の訪れた大きいデパートには各地のセンスある商品であふれ，極めてサービスのよい店員が多くて，これが一昔前の中国かと驚かずにはおれなかっ

た．上海のような都会では欧米と変らぬ高層ホテルが林立し，ショーを楽しみながら夕食する若い中国の人たちも目につくようになった．つい最近まで，友誼商店といった，外人旅行者用の立派なデパートでは，商品は中国のものに限られていたのだが，それが日本は勿論，欧米の最新のモードの品までとりそろえている姿が現実のものになった来ている．しかしその一方で都会と地方との格差はますます拡がり，人々の流動のはげしさもそれに拍車をかけているともいわれている．

もう一つ，私が驚かされた話がある．今まで中国の若い人々は，機会をみつけては日本や米国など海外へ留学し，博士号を取るまでその地で頑張り，その先は中国へ帰らず，できる限り外国で職業をみつけて永住するといったパターンが多かった．中国の政府をはじめ各地の大学などではこのようなエリートの流出に，どれだけ頭を痛めて来たかわからない．対策として，中国の大学で博士号を取ると，アカデミック・ポジションを確約して，勤務したのち将来留学や海外出張の機会を与える，とかいろんなことがなされて来たように思う．しかしごく最近は，外国へ向う留学生が大幅に減り，外国からのUターン組もうなぎのぼりに増えていると日本の雑誌も報じている．（Wedge，1994年12月号，P.17）それによれば，たとえば上海市は，広大な浦東地区の開発に情熱をもやす，先端技術を先進国で学んだ若者に多額の助成金を出して引きよせるといった企画が成功を収めているという．これは勿論中国の急速な発展と無縁でなく，上海や深圳など，外資系の合弁会社に就職口が大きくひろがって来たためと思われる．当然のことだが，中国では女子の就職も極めてスムースにいっているという．私がシンポジウムで若い人達に聞いたところでも，今まで大学でお世話になっていた教授の何倍かの給料を初任給でもらえる外資系の会社が少くないとの話であった．こういうアンバランスはまたある意味の弊害を生むことにつながりはしないか．

もう一つ，気になる話がある．私が済南のシンポジウムでもった印象の一つに，若い人々のポスターセッションを通じての発表が，独創的で大へん面白そうなのと，全くそうでないのとに大別される傾向があった点である．文革が終って，すでに10年以上，もうそろそろオリジナリティのある若い人の仕事がどんどん出て来てもいいのではなかろうか．

このことについて，私は，私の阪大当時博士号を獲得した学生で，いまは中国科学院の教授をつとめる方世壁君に聞いてみたことがあった．その答えは，これからの中国の研究の方向を示している，少くとも位置づけていると受けとれるものであった．中国では格差と矛盾をはらみながらも経済も工学も大きく発展をみるようになって来た．しかし国の文教政策は最近純粋な基礎研究よりも応用開発研究に力を入れる傾向にあり，大学も科学院もそれに乗らざるを得ない現状にあるという．私はしかし，何もこれが悪いこととは決して考えない．方世壁さんは石油樹脂やその他の機能高分子の開発で母国のために大きい成果をあげることができている．そういう，国のために貢献している先生方には経済的な余裕をもって基礎研究を並行して行える機会が与えられるようである．今回のシンポジウムでは，その試練を物語る発表がみられ，このことも大きい印象の一つであった．しかし，私がいつも希望を感じるのは，若い研究者たちが，一生けんめい自分の研究を進め，明るく前向きである点である．私たちのこのシンポジウムは，第7回くらいから，中国（台湾を含めて）・韓国・日本を中心とし，これに東南アジアを含めた形のものに発展するかも知れない．少くとも，学問の世界でこのようなアジアの連携の生まれることを心から期待して止まない気持である．